

<総評>

最近は学校や地区の催しとして「1行詩」を書くことがあるとのこと。例を見ると、標語ではなく1行詩としては、焦点となるタイトルが無い。口語詩句は俳句や短歌などの近接形と比べると季語も定型もなく、行分け詩としては行数が少ない。やはり、詩句の前後の空間にあるものを読み取る必要があるのではないか。今月はそんなことを考えた。

立ち漕ぎを  
するとき  
チュールスカートを  
ねおんてとらとしてなびかせる

---

さいう 石川県

——くっきりと映像が浮かび上がる。一度読むと二度と忘れないだろう。

炎天の底  
の  
小部屋の海にいて  
ねこのゆたかな寝相見ている

---

さいう 石川県

——「ゆたかな」という詩語として違和感が無くもない形容を、わざともつくることで印象を強めている。

いた場所をわすれて海にもどる人

---

雲理そら 大阪府

——詩句の前に「いた」場所と詩句の後に「もどる」場所は同じだろうか。想像力を刺激され、その分、世界は広がる。

さみしさと呼ばれるものの輪郭よ  
空を鳥から奪うのは雨

---

常田 瑛子 山口県

——初行と次の行との距離が絶妙。

職安に赤ん坊だけ抱いていく

---

桜庭 紀子 和歌山県

——個人の状況と社会的問題を一行で表現してインパクト充分。「だけ」が効いている。

心臓に国旗があって眠れない

---

千葉羅点 愛媛県

——論理をつかさどる「頭脳」ではなく、情念が宿る「心臓」だから眠れないのだろう。  
国旗というビジュアルは重たい。

水馬の匂い捕らえる初老の父

---

金光 舞 埼玉県

——嗅覚は視覚や聴覚より記憶に残りやすいらしい。思い出のアメンボの匂い。

妹を開けるのがこわい

---

塩見 佯 沖縄県

——「姉・兄」にとって、「妹」というのはセンシティブな存在だ。自分を敏感に反映してくれるから。

鳥のみる夢にかならず降っている

光の雨の名前を知らず

---

石村 まい 兵庫県

——鳥は飛ぶ方角も速度も光を目当てにしている。私たちもそう有りたい。恵みの雨のように。

何事も

終わってしまえば

楽なもの

コロコロ焼かれて

偶蹄目

---

波野 梅雨 東京都

——牛、豚などの偶蹄目はヒトが食料とする動物に多く、指が偶数の生き物。だから指が奇数のヒトは偶蹄目を食べる。発見だ。

雪解けの川のひとつが

(借りていた本、返そうか)

合流をする

---

快名 千葉県

——詩のなかでのマルカッコに囲われた部分はよく心象風景として描かれるが、この詩句は心象と現実どちらにも応用できて面白い。

Land とは廃工場の建つところ

Sea とは鳥を追い越すところ

---

高遠みかみ 大阪府

——土地と海が、人の生活心情と分かちがたくある大阪の風景が浮かび上がってくる。

火星にも水があるならあんぶれら

ふるものすべて明るいといい

---

夏山 葉 東京都

——「あんぶれら」を絶妙な位置に置くことで、水、アンブレラ、ふるという縁語が繋がり、火星の世界をリアルに想像させる。

子育てと介護は同じ緯度にある

夕日のような黄身を漬した

---

福地 餅子 東京都

——子育てと介護は庇護が必要な弱い存在を守ることが義務とされる。陽が落ちる頃にはもう疲れている。

ケチャップが二本もあって

恥ずかしい

---

中野 咲 千葉県

——「ケチャップ」は目立つ。そして臆面もなく普遍的で厚かましい。だから恥ずかしい。

わたしからこぼれる声の  
牛乳のような白さがまだ許せない

---

星谷麦 東京都

——乳臭いという言葉がある。思わず言ってしまう正論や理屈。現代ではなかなか落ちつきが悪い行為だ。堂々と言えるにはまだまだ。